

日本における石材採掘・加工業の戦後の変遷 - 公的統計資料から - Changes in building stone industry after the second world war in Japan

乾 睦子^{1*}

INUI, Mutsuko^{1*}

¹ 国土館大学理工学部

¹School of Science and Engineering, Kokushikan University

日本の石材産業が大規模に設備を導入し産業として確立したのは、明治維新後に西洋建築が導入されてからであり、比較的最近のことである。第二次世界大戦で一時期勢いが止まったが、その後急激に原石の輸入を増やし、加工大国となったとされている。さらに1990年代以降は加工を他国に外注したり国内企業が加工拠点を海外に移転したりする動きが盛んとのことである。

このような石材産業の規模・構造の変遷は、業界においては共通認識であるが実際にはまとまった記録が無かった。そこで、貿易統計や鉱業便覧などの公的な統計資料と、一部の関係企業の社史等を紐解いて裏付けを試みたので、それについて報告する。例えば財務省の貿易統計資料と、国土交通省の建設投資推移を重ね合わせてみると、高度成長期からバブル期にかけての「原石輸入・国内加工」というスタイルが主流だった時代と、より最近の「製品輸入」を主体とする時代とが、1990年代前半を境に明確に区切られることが分かった。また資源エネルギー庁の鉱業便覧他資料からは、近年の国内の採掘場数の継続的な減少傾向などが読み取れた。一方、墓石と建築石材が区別されていないことや、品目分類が数年ごとに変わること等、公的統計資料の限界も明らかになった。従って、関係企業の社内記録や、社史・社内報・関係者の自伝などの文献資料で補足することが有用であることが分かった。

キーワード: 石材, 石材産業, 輸入, 貿易統計, 鉱業便覧

Keywords: building stone, tomb stone, import, official data